KS 研究社叢書

小海永二

日本戦後詩の展望

KENKYUSHA

研究社叢書

小海永二

日本戦後詩の展望

KENKYUSHA

研究社叢書

著者紹介
小海永二(こかい　えいじ)。1931(昭和6)年東京生まれ。東京大学仏文科卒業。現在,横浜国立大学助教授,日本現代詩人会会員.著書に,詩集『定本峠』(花曜社),『近代詩から現代詩へ』(有精堂),『文学の教育・詩の教育』(同上),『現代フランス詩人ノート』(ユリイカ),訳書に,ルネ・ベルトレ『アンリ・ミショー』(思潮社),H・ミショー『みじめな奇蹟』(国文社),『ロルカ詩集』(角川書店),アンドレ・バザン『映画とは何か I, II, III』(美術出版社)などがある。

KENKYUSHA

〈検印省略〉

日本戦後詩の展望

昭和48年10月30日　発　行

定価は裏表紙,帯に表示。

著　者　小　海　永　二
発行者　小酒井貞一郎
印刷所　研究社印刷株式会社
発行所　研究社出版株式会社
〒162　東京都新宿区神楽坂1-2
TEL. (03) 269・4521 (代)
表紙印刷　大平舎美術印刷株式会社
装　幀　栃折久美子
© 1973 Eiji Kokai

1390-350020-1860

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します。

目

次

序　章　戦後詩とは何か　3
1「戦後詩」という呼称　3　2「戦後詩」への疑問　8　3「戦後詩」の語義と内容　19
第一章　戦争体験と詩　26
1 戦争のイメージ　26　2『荒地』の場合　37　3 加害者の視点　50
第二章　敗戦体験以後　61
1 敗戦の受けとめ方　61　2 戦後社会の現実　67　3 シベリア体験と安保体験　77
第三章　政治詩・社会詩の問題　93
1 政治詩・社会詩の流れ　93　2 政治詩・社会詩の困難　111　3 戦後諷刺詩の諸相　128
第四章　生活の場から　139
1 生活感覚・生活者意識　139　2 生活現実から社会現実へ　153

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

第五章　抒情詩の展開　163
1　抒情の新しい質　163
2　戦後抒情詩の特色——愛の詩と自然の詩——　182
第六章　生と死の認識　201
1　様々な死のかたち　201
2　生の意味の探求　216
第七章　土着の詩　232
1　詩の原点　232
2　農民詩の革新　248
3　「地方」の詩　257
第八章　詩の言葉と言葉の詩　271
1　言語の自立性　271
2　詩的言語の特質　281
3　言語のダイナミズム　299
あとがき　307
引用詩一覧　310
索引　巻末

日本戦後詩の展望

序章　戦後詩とは何か

1　「戦後詩」という呼称

「戦後詩」という呼称が一般に用いられるようになったのはいつ頃からだろうか。

わたし自身が詩にかかわりを持ち始めた頃の体験的な記憶に加えて様々の資料に当って得た感じでは、必ずしも十分正確な断定とは言えないが、ほぼ昭和三十年（一九五五年）頃からのことのように思う。昭和三十年、すなわち戦後十年。

この年、雑誌『詩学』はその臨時増刊号（六月刊）で〈現代詩・戦後十年〉の特集を行ない、「戦後代表作品集・一九四五―一九五五」、「戦後詩人論」（鮎川信夫）、「戦後詩論の焦点」（大岡信）、「戦後詩人10の仕事」（戦後詩人十人についての詩人論、取りあげられたのは、長谷川龍生、高橋宗近、安東次男、谷川俊太郎、西内延子、高野喜久雄、茨木のり子、大岡信、牟礼慶子、山本太郎）、「座談会・戦後詩の新しい展開」（出席者、関根弘、中村稔、清岡卓行、黒田三郎、長江道太郎）、「戦後詩書一覧」等を主要な内容として誌面を構成した。

ここで注目すべきは、その特集のタイトルが戦後詩十年ではなく、現代詩・戦後十年となっていることで、この段階では、「戦後詩」という呼称はまだ必ずしも十分に定着したものではなかったと考えられる。もちろんこれだけでは根拠としては不十分であろう。もう一つの証拠としてあげられるのは、座談会「戦後詩の新しい展開」で、このタイトルに戦後詩という用語が用いられ、またその中の小見出しの一つは「戦後詩の特徴」と題せられているにも拘らず、座談会の出席者の口からは、一度も戦後詩という言葉は出てきていない。また「戦後詩の特徴」という小見出しの内容も題名と一致しておらず、戦後詩の特徴についての言及は全くない。その代わりにこの座談会の中で用いられているのは、戦後の詩という呼び方である。この呼び方は、長江道太郎、編集部、黒田三郎の発言中に各一回ずつ出てくる。

さらに戦後詩人という呼び方について言えば、座談会の小見出しの一つに「戦後詩人の指向したもの」というタイトルがあるが、他には、それとは別の小見出し中の編集部の発言の中で、「戦後詩人」という呼び方が一回だけ行なわれているにすぎない。そして、同類の表現として、長江道太郎によって、「戦前の詩人」の語と対比して「戦後の詩人」という呼び方が二回なされており、少なくともこの座談会中では、「戦後詩人」という呼称と「戦後の詩人」という呼称とが並存し、両者の間に明確な使い分けがあるとは思われない。

しかしながら、この座談会のタイトルは明確に「戦後詩の新しい展開」と題されており、それが編集者の名づけであったにせよ、この呼称がその時期の詩壇感覚から言って不自然、唐突なものであっ

たとは考えられない。

もう一つ、鮎川信夫の「戦後詩人論」であるが、この題名が編集者の提示したものか、それとも筆者自身の意志によるものか、必ずしも分明ではないが、とにかくこの題名は、戦後詩壇の代表的な詩論家と認められている鮎川信夫がその評論の題名中に戦後詩人ないし戦後詩の呼び名を使った最初であって、鮎川はこの中で「戦後詩」の呼称を用いながら、戦前の詩と戦後の詩とを区別する最も重要な違いを、戦後の詩における〈意味の回復〉に求めている。鮎川信夫のこの「戦後詩人論」は、戦後詩の特質を最も早く指摘した重要な論文の一つである(この論文の内容についてはまた後でふれる)。

この三十年にはまた書肆ユリイカから『戦後詩人全集』五巻が刊行されている。正確には、前年の九月からこの年の五月にかけて順次刊行されたのだが、この企画が、『詩学』の臨時増刊と同様、戦後十年という一つの時代的な区切りを意識したものであることは言うまでもないだろう。あるいは『詩学』の企画自体、『戦後詩人全集』の刊行に刺激されたものであったかもしれない。この全集の刊行そのものがまた、戦後詩人ないし戦後詩の呼称を定着させるのに大きな役割を果たしたと思われるのだが、今手許にある第一巻、第三巻、第四巻、第五巻の「解説」によって調べると、まず中村稔、大岡信、谷川俊太郎、山本太郎、那珂太郎、新藤千恵の六人の詩人の作品を収めた第一巻の「解説」中で、木下常太郎は、「戦前詩人」と対比的に「戦後詩人」の特徴を論じ、その特徴を、〈先輩詩人〉と〈自己のぞくする社会の過去〉とに対する〈不信〉、および〈詩の中に形而上学を持ちこむという新しい傾向〉に見出している。彼はその文中で「戦後詩人」という呼び方を頻繁に用い、さらに「戦後詩」と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

いう呼称も、一回だけであるが用いている。また、第五巻の「解説」中で、壷井繁治は、「戦後詩」という呼称こそ用いていないが、〈戦争の荒廃の中から登場してきたいわゆる戦後詩人〉（傍点引用者）という言い方をして、この巻に取りあげられた関根弘、木島始、清岡卓行、峠三吉、許南麒、長谷川龍生の六人の詩人について、〈この巻の詩人たちはすべて新日本文学会の会員であり、その関係から一般に左翼的立場にたつ詩人と見られているが、一時代前のプロレタリア詩人にくらべて、現実にたいする考え方、感じ方においても、詩的方法においても複雑であり、中にはかつてのプロレタリア詩に対して相当批判的、というよりも否定的立場をとっている者さえある。そこによかれあしかれ、戦後詩人としての特色も見られる。〉（傍点引用者）と論じている。

これに対して、三好豊一郎、黒田三郎、高橋宗近、木原孝一、高野喜久雄の五人の詩を収めた第三巻の「解説」を担当した菱山修三の文中には、「戦後詩」の語も「戦後詩人」の語も全く現われず、代わりに「現代詩」の語が用いられている。〈ここに集められた諸家はいわゆる『荒地』のグループに所属してこの邦の現代詩を推進してきたし、いま推進しているひとたちだ〉〈『荒地』の詩の運動はこの邦の現代詩に何を附け加えたのか？〉（傍点引用者）というように。さらに、野間宏、安東次男、平林敏彦、飯島耕一、磯永秀雄、河邨文一郎の六人の詩を集めた第四巻の「解説」を書いた金子光晴の文中にも、〈戦後の詩壇〉とか〈戦後の三十代の詩人〉とかいう言い方はあっても、「戦後詩人」「戦後詩」の用語は全く出てこない。

一々わずらわしいまでに、「戦後詩」および「戦後詩人」の語が、戦後十年という時点で、どの程

度、またどのように用いられていたかを、二つの資料によって見てきたが、さらにもう一つ、わたし自身が、初め『戦後詩人全集』の月報用にという依頼で書き、のち計画が変更されて月報を止めることになったため、三十年七月に出た同人誌『希望（エスポワール）』誌に発表した「戦後の詩における二十代の登場」と題する短文を今読み返してみても、戦後詩という用語をわたし自身全く用いていない。わたしはそこで〈戦後派文学という名で呼ばれる小説〉の成果と対比して戦後の詩の成果について書いたのだが、そこでわたしは、「戦後の詩」という言い方を用いて、今日言うところの「戦後詩」について論じている。

以上のような検討を通じて結論的に言えることは、戦後十年を経た昭和三十年（一九五五年）という時点で、それまでの戦後の詩をふりかえる企てがあり（『戦後詩人全集』の刊行と『詩学』の特集）、この頃から、まだ多少不安定ながら「戦後詩」という呼称がようやく用いられ始めたということであろう。ただし、鮎川信夫は右に名をあげたその「戦後詩人論」において「戦後詩」という呼称を内実あるものとして用いており、この段階でこの呼び方を十分自覚的に採用していると見られる。なお、彼はその翌年の詩誌『季節』十月創刊号に書いた「詩人と民衆」と題する文章中でも、戦後詩という用語とその概念とをはっきりと意識的に使用している。また、木下常太郎の場合も、その『戦後詩人全集』第一巻の「解説」で見る限り、この段階で「戦後詩」なる概念をかなり自覚的に把握しているように思われる。

次いで、昭和三十一年（一九五六年）の『詩学』七月号に、吉本隆明が書いた「戦後詩人論」になる

と、「戦後詩」の内実がいっそう明確にとらえられ、同時に「戦後詩」という用語も安定性を増してきていることがその文章の内容から理解できる。

2　「戦後詩」への疑問

それからさらに十八年、戦後二十八年経った昭和四十八年という現在の時点で、この「戦後詩」という呼称は、それでは完全に定着し、そして安定していると言えるだろうか。

一度定着した上で、改めてその呼び名が今もなお妥当かどうかが問題にされているのが、今日の情況である。たとえば、『ユリイカ』昭和四十六年十二月の特集〈戦後詩の全体像〉中の共同討議(座談会)「現代詩の主題を追う」(出席者、天沢退二郎、吉増剛造、長田弘、清水昶)の冒頭における、天沢退二郎の次のような発言がある。

天沢　いま取り組んでいる宮沢賢治全集の仕事の関係で、会田綱雄、吉岡実、入沢康夫、ぼくの四人で話す機会がよくあるわけですが、そこでこのあいだ戦後詩のことが話題に出た。そうするとやはり、戦後詩という言い方に非常に違和感を感じるというのが、大体共通した考え方なわけです。それには、四人の間に若干のニュアンスの違いがある。ひとつには、いまさらもう戦後ではないという考え方、これは入沢さんなんかそういう言い方をする。もうひとつは、会田さんなんかの場合で、戦前から詩を書いてきて戦後もずっと続けて書いてきている。そうすると戦後詩と言われても

実感がないという、まあ大体その二つの立場がある。ここに集った四人は、戦前生まれてはいたけれど、非常な餓鬼で、詩も糞もないわけです。そういういろいろなことから、戦後詩の総特集といっても、「戦後詩」という区切り方そのものを暫定的なものと考えなければならない。それは当然のことです。しかし一方、ぼくらが物心ついて、それぞれ詩を書いたり読んだりすることに意識の焦点を合わせはじめた頃にぼくらを取り囲んでいたもの――たとえば、この『ユリイカ』という雑誌が、今回「戦後詩」という幅で捉えようとしている、そういうもの――があったわけです。（中略）ぼく自身は「戦後詩と私の私的断絶」（「現代詩鑑賞講座」第八巻月報、角川書店、昭和四四年九月）という文章で、いわゆる戦後詩というものに対して初めから何か違和感があって、いまもまだ自分の書いたものが戦後詩という枠組みのなかに区切られるのは何か違うんじゃないかという気がする、ということをすでに書いたわけです。

右の発言の中で言われている「〝戦後詩〟と私の私的断絶」という文中では、天沢は次のように書いている。

〈少年期の私にとっての詩、《書くこと》と《読むこと》は、戦後詩の流れとはまったく断絶したまま、当の戦後詩がそれを否定したところから出発したところのもの――即ち昭和十年代のモダニズムへとさかのぼってしまう。鮎川信夫とも関根弘ともあるいは大岡信とも全くかけはなれたところで私の初期詩篇数百篇が、昭和二十年代の終わりから昭和三十年にかけて堆みあげられたわけだ。〉

〈昭和三十年の三月に高校を出て駿台予備校に通った一年間に、いわば六三制の裂け目にあやうく身を浮かせてはじめて学校制度の抑圧と自我との緊張関係がぬきさしならず私の意識をしめつけたときに、私はそれまでの田園詩・恋愛詩・言語遊戯の泥池（沼というほどのこともありはしなかった）からようやく首ひとつ出すと、いつのまにか、大岡信『記憶と現在』、田村隆一『四千の日と夜』という二冊の詩集を買っている自分に気づき、これがとにかく戦後詩にかかわった最初のきっかけであり、最初の詩集『道道』を贈った返事のハガキを大岡信にもらって、詰襟の学生服で自動車に乗って寮のすぐ近くの大岡家（ひどいボロ家とすてきな奥さん）へ行ったのが戦後詩人とのつきあいの最初のきっかけだった。

それ以来、二、三か月に一度は大岡信を訪ねておよそ思いつく話題をすべて吐き出しつくし、疲労困憊して夜中すぎに帰ることが数年続き、読み、書き、発表するうちに少しずつ戦後詩、現代詩についての〝知識〟はふえたが、自分、自分の書くものとそれら詩や詩人たちの世界との断絶は少しもなくなるわけはなかった。

自分が《書くこと》によって入りこむ世界は次第にある質感をもって感受されてくるが、他人がそれをそのように感受するだろうとはとうてい思われぬ。私はしょせん詩を書くことにおいては他人とはかんけいないのだ。他人の詩を読み、何かを感じ取り、ときには影響？　されることは当然あるが、それは私がそのように読み取ったので、つまり私がそれを作品たらしめたので、その作者である他人とは何のかんけいはない。私の作品と読者とのかんけいも同じことだ。戦後詩の流れと

やらいうものと私の作品系列との間にある断絶は、さまざまなかかわりによってもついに埋められてはいないのだ。〉（傍点原文）

自作に関して戦後詩という呼び方に違和感をおぼえると言う詩人は、右の天沢退二郎や、また会田、吉岡、入沢らの詩人だけではない。恐らく天沢退二郎の世代から見ればまぎれもない戦後詩の作者に入るだろうと思われる谷川俊太郎や山本太郎も、この「戦後詩」という呼び方が自分の詩にはそぐわないという感じを抱いている。

〈「戦後詩」なんて言葉は、ジャーナリストの言葉で、詩人の言葉ではないとも思う。「詩」を考えることは私にもある、「近代詩」を考えることもある、「現代詩」という発想もやむを得ず使うことがある、が、「戦後詩」を考えることは、私にはほとんどない。

こういう言い方をすることで、私は何かを主張したいのではない。私はただ自分をそういう者として規定するだけだ、それも相対的に。つまり敗戦というあの大きなできごとを、同じ年齢で受けとった私たちの間でも、その受けとりかたはさまざまだったということだ、ましてその後の詩の書きかたは。私には戦後詩という文脈の中で自分の詩をふり返ることが、どうもしっくりこないというだけの話だ。詩を書き始めた一九五〇年代の初め頃私の愛読していたのは戦前の宮沢賢治であり、岩佐東一郎であり、近藤東であり、安西冬衛だった。《荒地》の詩は、二三の例外を除いて私にはちんぷんかんぷんだった。《荒地》に限らない、《列島》の詩も、《時間》の詩も、《歴程》の詩

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo